

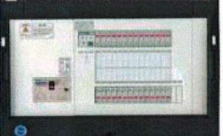
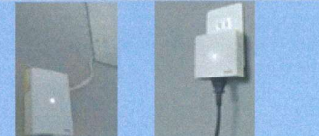


感震ブレーカーを設置しましょう 令和8年10月1日から設置補助開始

大規模地震の発生後、大きな脅威となるのが「地震火災」です。過去の震災における火災原因の半数以上は、電熱器の転倒や停電復旧時の通電など「電気」によるものでした。

「感震ブレーカー」は、一定以上の揺れを感知すると自動で電気を遮断する装置です。不在時の地震や、避難時に自力でブレーカーを落とす余裕がない場合でも、電気火災を自動で防いでくれます。

上島町では、令和8年10月1日から設置費用の一部補助制度をスタートします。命と財産を守るため、この機会に設置を検討しませんか。詳しくは広報折り込みチラシをご覧ください。消防防災課へお問い合わせください。

感震ブレーカーの効果と種類			
分電盤タイプ (内蔵型)	分電盤タイプ (後付型)	コンセントタイプ	簡易タイプ
			
機器概要 分電盤に内蔵されたセンサーが揺れを感知し、ブレーカーを落として電気を遮断	分電盤に感震機能を外付けするタイプで、漏電ブレーカーが設置されている場合に設置可能	コンセントに内蔵されたセンサーが揺れを感知し、コンセントから電気を遮断	ばねの作動や重りの落下によりブレーカーを落として、電気を遮断
特徴 電気工事が必要		電気工事が不要なタイプ(コンセント差込型)と必要なタイプ(コンセント埋込型)の両者がある	電気工事が不要

身近な製品から突然の発火!リチウムイオンバッテリーの正しい扱いで火災を防ごう

スマートフォンや加熱式タバコ、電動アシスト自転車などに使われている「リチウムイオンバッテリー」による火災が増えていきます。小型でハイパワーな反面、強い衝撃や熱に弱い特徴があります。「落としてから本体が熱い」「膨らんでいる」「異臭がする」といった異常に気づいたら、すぐに使用を中止してください。

また、充電したまま放置することや、指定充電器以外の使用は大変危険です。製品を捨てる際は、絶対に「燃えるごみ」に混ぜないでください。ごみ収集車や処理施設で強い圧力がかかり、大火災につながります。

正しい使い方と適切な廃棄で、大切な命と町の財産を守りましょう。



令和8年8月出動件数

地区	弓削	生名	岩城	魚島	その他	合計	R8累計
火災	0	0	0	0	0	0	0
救急	17	12	10	0	0	39	305

(令和8年8月31日現在)

【上島町消防署】 ☎ 77-4118
【上島町消防本部消防防災課】 ☎ 77-3166

地域の絆が、災害に強い町をつくる。
消防団員絶賛募集中!

- 【発火予防のポイント】
- 正規品の充電器を使う
機器に指定された付属の充電器や、安全基準(PSEマーク等)を満たした充電器を使用する。
- 衝撃を与えない
落したり、ぶつけたりした後の使用には十分注意する。尻ポケットに入れたまま座るなど強い圧力をかけない。
- 高温の場所に放置しない
真夏の車内や、直射日光の当たる窓際で充電・保管をしない。
- 正しく捨てる
捨てる際は家電量販店などの協力店に持ち込む。
(上島町では、充電用電池の回収は行っていない)

9月号で示した1日当たりの横径肥大量は、少量灌水開始の9月1日以降、急激に低下しており、この部分をもう少し詳しくみてみましょう。9月号の図3は調査全果実(各区40果)の平均値でしたが、調査日に裂果等(7月中は二次落果が発生)によりラベルを付け替えた果実を省いて再計算すると、今月号の図1の破線となりました(実線は全果平均で先月号の図3下と同じ)。少量灌水へ移行した9月1日以降は、処理直後(9月3日調査)に肥大量が大きく変動しましたが、その次の調査日(9月17日)以降はあまり差がみられません。

1 未裂果果実の1日当たり肥大量

9月号に引き続き、令和元年の試験経過をお話します。



図1・2は変化の大きかった9月上旬を拡大したものです。灌水量100%区はその前とほぼ同量の肥大を続けていますが、同67%区は、灌水量を33%減らしたにもかかわらず、それ以前よりもむしろ肥大量が大きくなり、9月1日から17日にかけては横径肥大量が年間で最も多くなっています。すなわちこの同67%区の甘平は、9月上旬から中旬にかけて果実肥大の極大期であったことが分かります。割れ残った果実でこうですから、裂果してしまった果実はこれ以上に肥大していたことでしょう。

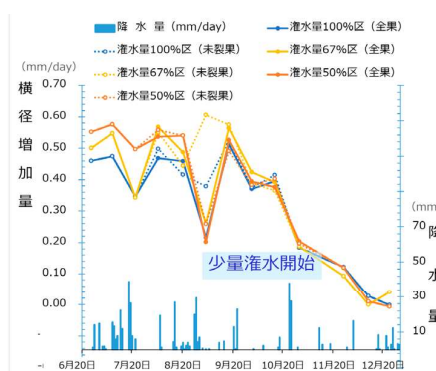


図1 初秋季の少量かん水が「甘平」果実肥大に及ぼす影響

図2は、この試験での裂果状況を示しています。この時の試験圃には非常に多くの果実がなっており、

2 灌水量の違いと裂果状況

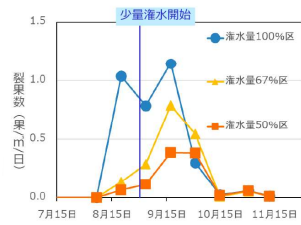


図2 樹容積1㎡・1日あたりの裂果数の推移

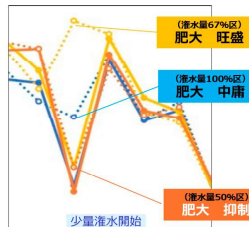


図1-2 図1の8月下旬から9月上旬を拡大

状になつてしまう懸念がありますので、抑制をどこまでかけるかは注意が必要です。
この試験では図1の下方に示すように定期的な降雨もあり、強い肥大抑制は一時的なもので、収穫期まで少量灌水を継続できました。9月下旬以降は他の区と比べても肥大抑制効果がみられなかったため、少量灌水によるスナガリ果の発生リスクは生じなかったと考えられています。

裂果数の調査は毎日行いましたが、月2回の肥大調査日に合わせて集計し、1㎡・1日あたりの裂果数として表しています。少量灌水に移行した9月1日以降は灌水量が少ない程、1日当たりの裂果数も少なくなっており、これは予想通りの結果でした。
しかし、それよりも注目すべきは、少量灌水を始める直前の8月20日(8月3日から20日の集計から算出)、灌水量100%区はその他の区に比べてきわめて多くの果実が割れていることです。この灌水量100%区は、8月5日から20日までの期間と、9月3日から17日の期間に裂果のピークがあり、ちょうど縦割れ主体の前期裂果と横割れ主体の後期裂果に相当します。そうすると少量灌水に移行した2区(同67%区、同50%区)は、「前期の縦割れ主体の裂果が極めて少なかった」ことを意味します。この時は、調査した私本人もその理由がよく分かっていなかったのです。その理由は、先に6月号で掲載した令和7年の菊間の試験の後でこの試験をもう一度振り返り、当時の調査データを見返して、「なんと!そういうことだったのか!」と気付いたことがあります。
来月号では、このあたりを詳しく解説します。